千葉県出土の動物形土製品

四　柳　　隆

1．はじめに

私は昨年，研究連絡誌第27号に於いて「四街道市小屋ノ内遺跡出土の土製品について」と題して資料紹介を行った。大変簡単な資料紹介であり遺物の持つ情報のほんの一部しか抽出できなかったうえに，不勉強がたたってその性格については全く明らかにしえなかった。

しかしそれを転機に類例を集成し，研究史を勉強することによって色々と考えてみようという目標が出来たことは，私にとって大変意義のあることであった。現状では確たる考えを持つには至っていないが，今回こういう機会を得たので中間報告の意味で紹介してみたいと思う。なお，人形土製品（＝土製人形）の資料収集の過程で馬形土製品（＝土馬）との関連の重要性を無視することは不可能であるという考えに至り，併せて取り扱うこととした。

2．研究史

はじめに断っておくが，ヒト形土製品のみを扱った研究や報告は皆無に等しい。そのため馬形土製品の研究史からのアプローチという手段を採ることとした。

馬形土製品に関する最初の研究は大場磐雄氏によってなされた(註１)。これ以前にも資料紹介の類は多数存在するが(註２)，体系的に扱ったのは大場氏が最初である。まず材質的に石製と土製に分類し，土製のものを土師質と陶（須恵）質に分けている。そのほかにも木，竹，紙，藁製等の存在の可能性を指摘しているがここでは扱わない。続いて形態的に「明らかに馬と見られるもの」と「馬が否か不明であるが一種の獣類とみられるもの」に分類し，前者を「馬具を着装した飾馬」と「然らざる裸馬」に分け，「本来が飾馬であって，然らざるは簡略化されたもの」であると考えている。また「本品解決に重大な鍵」となるとして出土遺跡や出土状況からも検討を加えて祭祀遺物または信仰品であることを証明し，「原史時代以降であることは言う迄もなく，更に或ものは歴史時代に入って居よう」と簡単な年代を与えた。

さらに1966年大場氏は新たな見解を述べている（註３）。前掲の論文より29年の歳月を経た後のものでかなりの追加資料を得ての論考である。氏は，まず材質的に土製・石製・鉄製・板製に分類し，「そのうち土製が圧倒的に多く，全体の九割程度を占めている」としている。本稿では，その主旨から石・鉄・板製のものは扱わない。大場氏は土製を「狭義の土製（＝土師質）と陶製（＝須恵質）の二種」（カッコ内筆者）に分け，また形態的には前掲と同じく飾馬と裸馬とに区別したが，この差は「祭儀の内容により，または神の嘉納の種類によって」生じたものであり，「必ずしも一定していなかったとすべき」であると考えている。両者をさらに以下のように分類している。

１土製　A飾馬　a皆具式
　　b簡略式
　　B裸馬　a橿原式－顔が三日月状
　　b土獣式－馬か否か不明

そしてその性格であるが，「水霊祭祀」「峠神祭祀」「墓前祭祀」の可能性を指摘している。

さらに，これは現在に於いても言えることであるが，出土例が西日本に多く東日本に少ない理由について「馬形使用の祭祀が西日本に発達し，その余波が東日本に波及した」と考えた。

前田豊邦氏は以下のように述べている（註４）。まず大場磐雄氏の述べた「土獣式」は，馬の特徴は何等備えていないとして除外した。また「橿原式」については，土井実氏の報告（註５）のものとも照らし合わせて馬と断定している。前田氏は土師・須恵という材質については無視し，「土製馬の姿相にのみ着目して分類を試み」ている。それによると

A類－馬具として，面繋，胸繋，尻繋，轡，手綱，鞍，鎧などが粘土の紐や板の貼付手

法によって着装されるもの。

B類－馬具として，鞍のみが粘土の板の貼付手法によって着装されているが，他の馬具，たとえば手綱や尻繋などが線描き手法で表現されているもの。

C類－馬具として，鞍のみしか認められないもの。

D類－馬具としては，何等認められない裸馬。

となり，「さらに各類とも1類に比較するとやや抽象化されているものを2類」としている。上記の4分類についてはかなり具体的であるが，1類と2類の分類方法は主観的な要素が強いと言わざるをえない。各類の性格については不明であるとしている。続いて出土状況を古墳・神社・寺院跡・集落跡・国庁・窯跡・河川に分けて出土例を検討し，そこから葬制・神社祭祀・井戸祭祀・河川祭祀という4面の性格を想定した。葬制を除く3面についてはいずれも水に関連することを指摘している。そして一元的な性格のものでないとしている。また埴輪馬の後退形式の可能性は否定した。

小笠原好彦氏は畿内の出土例を中心に述べている(註6)。氏は大きく2段階10形式に分類している。

第1段階（馬具を表現する段階＝飾馬）

A形式－馬具を粘土紐のみで表現するもの。一つの個体に馬具の全てがつけられるとは限らない。

B形式－粘土紐と沈線とを併用して馬具を表現するもの。

C形式－馬具の表現が粘土を貼り付けた鞍に限られるもの。

第II段階（馬具が省略される裸馬の段階）

D形式－C形式から鞍の表現をとった形態。

E形式－粘土を折りまげて断面がU字形の胴部をつくり，胴部の一部を凹ませて脚をつける。

F形式－E形式が小型化したもの。

G形式－F形式に較べてさらに小型化。

H形式－G形式よりもひとまわり小型化。

I形式－H形式をさらに小型化。犬に近い。

J形式－極端に小型化。馬とはおよそかけはなれた形態。

以上のように分類し，「粘土紐で馬具をほぼ完備させた比較的大型のものから，馬具が省略され，同時に小型化する過程をたどったことが推測される」とした。そして各形式の出土状況と共伴遺物から検討し，以下のような実年代を与えた。

A形式－7世紀後半およびそれ以前

B形式－藤原京造営年代

C形式－平城京造営のごく当初

D形式－720～730年代

E形式－740～760年代

F形式－長岡京遷都以前，780年頃

G形式－9世紀前半

H形式－9世紀中葉

I形式－9世紀末

J形式－10世紀前半

小笠原氏のいう飾馬から裸馬，及び小型化という形式変遷についてと実年代を与えたことについては評価できるが，E形式からJ形式に至る小型化の過程についてはかなり主観的な要素に左右される点があることも否めない。

小笠原氏の研究と相前後して各地方に於ける研究が活発に行わている(註7)。関東地方については中山吉秀氏の研究が挙げられる（註8）。

中山氏は南関東地方の竪穴住居跡出土の土製馬・土製人形について取り上げているが，当時はまだ類例が少なく東京都清瀬市野塩西原遺跡，千葉県柏市鴻ノ巣遺跡，同印旛郡印西町北ノ台遺跡，埼玉県熊谷市西別府西方遺跡と4遺跡の資料にとどまっている。氏は出土状況の検討から「水霊信仰」と「カマド神信仰」の存在を示唆し，元来生馬を奉納していたが経済的理由からかわりに土製馬を使用することが一般的になり，さらに時代とともに祈願の内容が変わって絵馬のようなものに変化したと断定している。馬形土製品→絵馬という変遷は過去に山中笑氏が指摘している（註9）。

藤岡孝司氏は千葉県内の出土例を集め，共伴遺物から年代を導き出している(註10)。その結果印西町北の台遺跡（後述）の例を除き概ね10世紀代であり畿内から西日本では消滅した後の所産であることを指摘した。

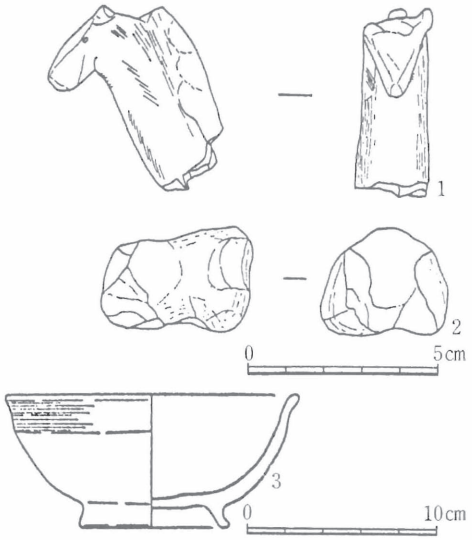
3．千葉県内の出土例

千葉県内の出土例はここ数年でかなり増加しているものの，絶対数は決して多いとは言えない。それらの個々について紹介したいと思う。分布については図に示したとおりである(第1図)。現在

のところ太平洋沿岸地域と安房地方での出土例はないが，これは調査数の少なさによるものかもしれない。

①柏市鴻ノ巣遺跡（註11・第２図）

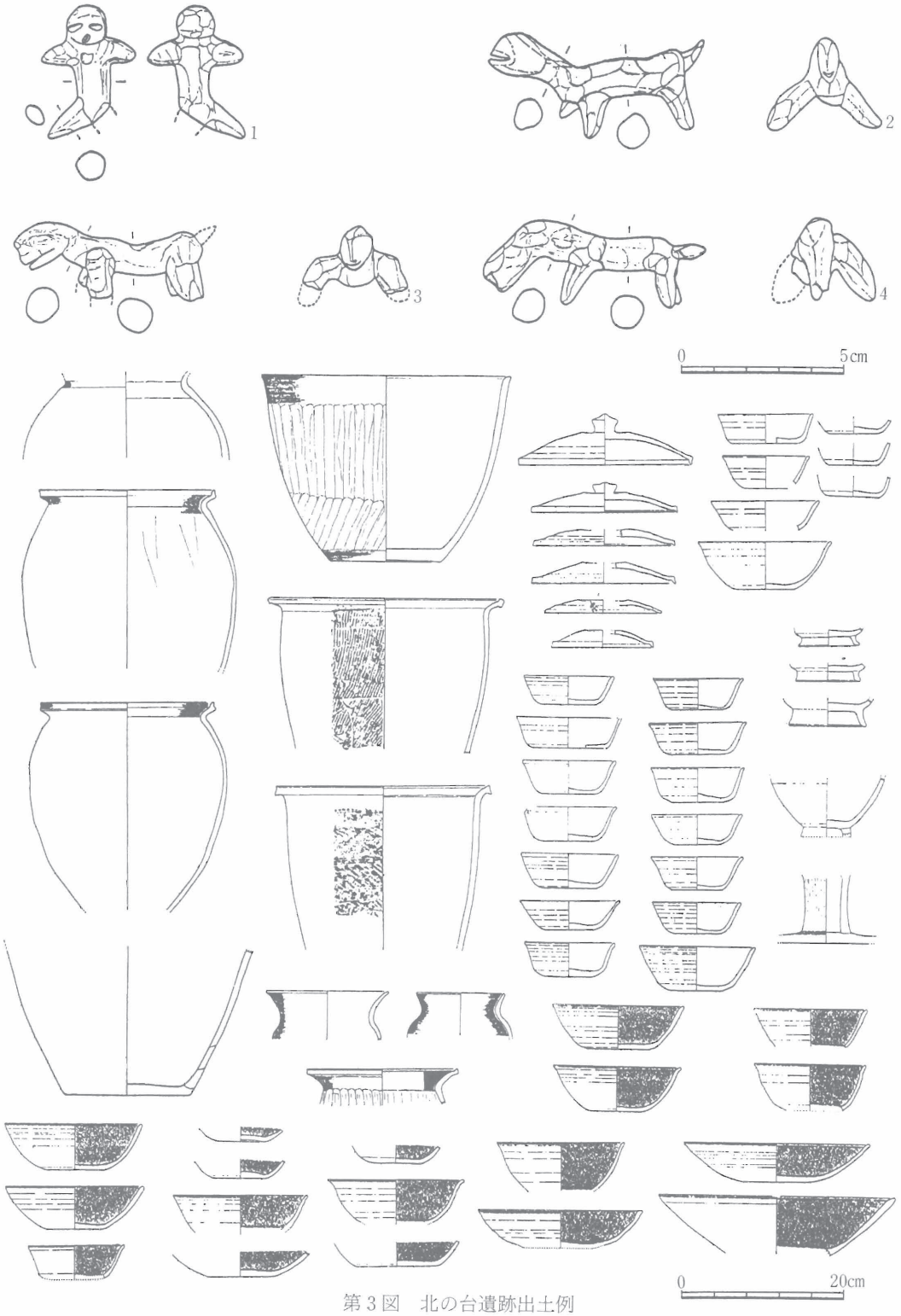
第24号住居跡から馬形土製品が２点出土している。ピット内から多量の焼土・炭化物とともに鉄塊が多く出土しており，「たたら工作用の遺構か」とされている。馬形土製品はＰ７とされたピット内から出土しており，胎土の違いから別個体と推定されている。



第２図　鴻ノ巣遺跡出土例

第１図　千葉県内動物形土製品分布図(1:100,000)

1は頭部破片で，僅かにS字状に曲がる首部より先細る顔部をやや斜めに造り出し粘土紐の貼付により立髪と耳を表現する。頭頂部の立髪と右耳は欠損する。目は小粘土粒を貼付して表現するが，



第3図　北の台遺跡出土例

右目は剝落している。整形は指ナデ・ヘラナデにより入念に行われる。

2は胴部破片であるが馬かどうかははっきりしない。破損・摩耗が激しくかろうじて後足部・尾部が確認できる。粘土塊から造り出し，指ナデにより整形を施す。現存長4.2cm。

共伴遺物としては3の高台付きロクロ土師器があげられる。カマド焚口内より出土しており，内面黒色処理が施されている。10世紀前半に比定されよう。

②印旛郡印西町北ノ台遺跡（註12・第3図）

第5号住居跡から馬形土製品3点，人形土製品1点が出土している。当跡ではカマド天井部の芯（補強材か？）に縄文時代中期の土器片が使用されるという点で興味深い。

1は人形土製品で，カマドに近い床面のやや上から出土している。円筒状の胴部に頭・手・足を貼付け，目は刻み，口は刺突により表現される。整形技法は手足は指頭によるおさえ，胴部はナデによる。左足が剝落する。

2は土製馬で，丸みを帯びた胴部が首部にかけて立上がり縦に偏平な頭部が付く。刻みによる口が表現されるが目，鼻，立髪等はみられない。足と尾は貼付によるが右後足は剝落する。尾は上に突き上げる。全体に指頭によるおさえと篦ナデの整形が見られ一部には指紋が残る。全長6.1cm。

3も土製馬で形態，整形手法ともに2に類似するが頭部は貼付によるものであり，足が太いという点でやや相違する。両前足先端と尾部を欠損する。残存部分全長6.6cm。

4も土製馬であり，やはり形態，整形手法とも前二者に共通する。口が縦の刺突によること，尾を水平に延ばすこと等が相違点として挙げられようか。当遺物については破片の一部がカマドのソデ内から出土しており，住居の一括遺物として取り扱ってよさそうである。全長7.1cm。

2～4は「土製馬」として紹介されているが，馬としての特徴はなんら備えていないことは一目瞭然であろう。

共伴遺物としては甕・甑・蓋・高杯・杯等の土器の他に鎌・鉄鏃・砥石が挙げられ，かなり多様である。土器からみて8世紀末葉から9世紀初頭に比定されよう。

③印旛郡印西町谷田木曽地遺跡（註12・第4図）

遺構外出土資料の人形土製品の頭部が紹介されている。目と口が浅いくぼみによって表現されており下から細い孔が穿たれる。串状のもので胴部と接続されたのだろう。

遺跡は先土器時代から古墳時代後期にわたる複合遺跡である。断定は出来ないが，おそらく古墳時代後期鬼高式期の所産であろうと思われる。

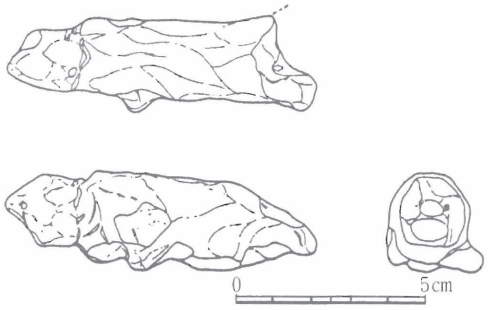
④印旛郡印旛村岩戸広台遺跡A地区（註14・第5図）

表採資料の項で動物形土製品として紹介されている。篦状工具及び指頭等により作出し，目は刺突により表現される。胴部と頭部の境にも環状に刺突が認められる。尾に近い部分を欠損する。残存部分全長8.2cm。前出の北の台遺跡の資料よりさらに馬らしい特徴は見られず，かろうじて4本足の獣であることが推定されるに過ぎない。

⑤印旛郡印旛村遂昌路遺跡（註15）

住居跡から3点出土している。未報告資料のため図示できないが，形態的には岩戸広台遺跡A地区の例と類似する。遺跡としては縄文時代から奈良・平安時代の複合遺跡であるが，出土した住居跡は担当者の話では8世紀代になりそうとのことである。新聞では「土馬」として報道されたが，やはり4足獣であることがかろうじて確認できる程度で馬としての特徴は備えていない。詳細については正式な報告を待ちたい。

第4図　谷田木曽地遺跡出土例



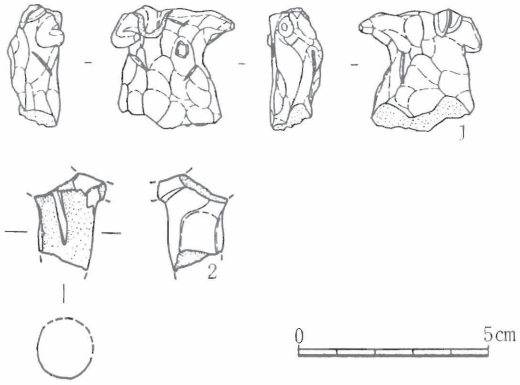
第5図　岩戸広台遺跡出土例

⑥四街道市小屋ノ内遺跡（第６図）

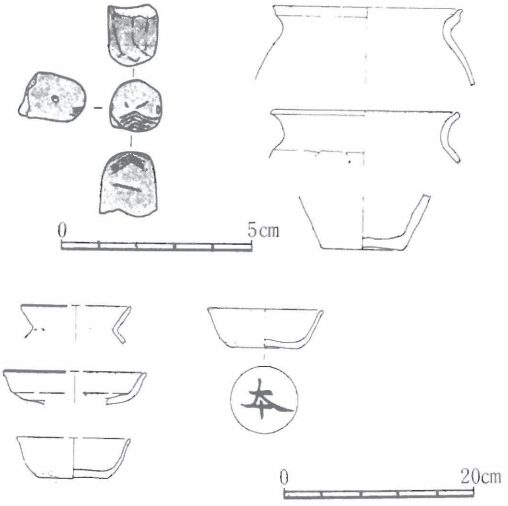
遺構確認面より単独で人形土製品が２点出土している。遺跡は縄文時代早期から中世にわたる複合遺跡で，特に掘立柱建物跡が50棟以上検出されている。

１は前回紹介した人形土製品である(註16)。胴部・両手が残存し，頭部と脚部をソケット状にはめ込んだと思われる孔が穿たれる。右手は前方に折り曲げ左手は水平に横に伸ばすという姿勢をとっているが，このような例は全国的にも他に類を見ない。整形は指頭と篦状工具によるナデを施している。

２はその後出土した人形土製品で胴部のみ残存する。胴部の断面はほぼ円筒状で，こちらも頭部をソケット状に接続したと思われる孔がある。整形技法は１と同じである。



第６図　小屋ノ内遺跡出土例



第７図　公津原Loc.40遺跡出土例

⑦成田市公津原遺跡群Loc.40遺跡

（註17・第７図）

第22号住居跡から動物形土製品の頭部と思われる破片が出土している。赤彩が施され，目と思われる部分は貫通している。

共伴遺物としては土師器甕・壺・杯が挙げられるが，杯に見られる墨書や赤彩が残っていることから８世紀後半に比定されようか。

赤彩される例はほかに見られず，そのため藤岡氏は同一視していない。

⑧千葉市大道遺跡（註18・第８図）

表採資料として「土製人形」が紹介されている。２枚の鋳型で型をとって作られている。先述の藤岡氏の論考ではその製作手法の特殊性から「現段階では同一に扱わな」かった。

鋳型で型をとる手法は近世的な要素が濃く，いわゆる「泥メンコ」を連想させる。また佐原市仁井宿東遺跡第15号溝状遺構から類似例が出土しており（註19)，「七福神の類ではないか」と推定している。やはり近世の所産と考えるのが妥当であろう。

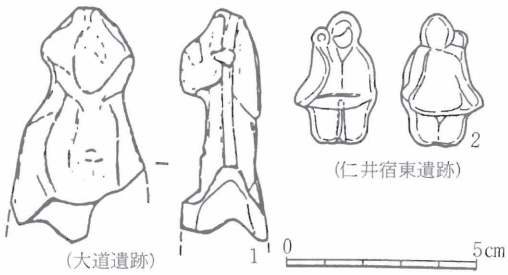
⑨君津郡袖ケ浦町永吉台遺跡群西寺原地区

（註20・第９，10図）

馬形土製品が２点出土している。

１は第92号住居跡から出土したもので，首部から頭頂部にかけてのみ残存する。立髪が表現されており線刻による面繋，手綱が確認できる。残存状況は良くないが，馬であると断言できる資料である。いわゆる飾馬であるが，千葉県内では唯一の出土例である。

共伴遺物としてはロクロ土師器（杯・椀・皿・



第８図　近世の泥人形

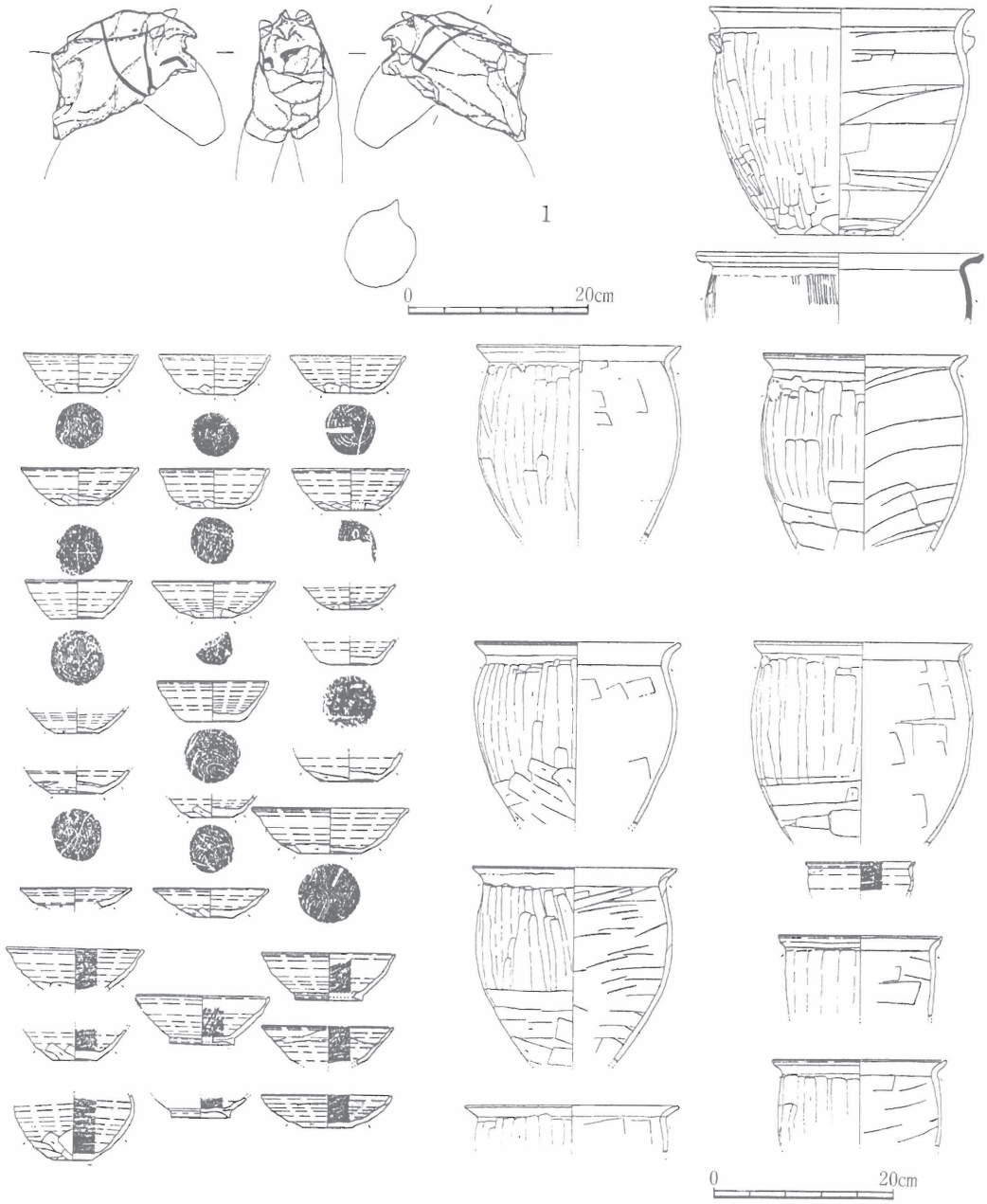
甕）が主体で，他に土師器（甕・甑）須恵器（甕）がある。報告書の中で出土土器の編年を試みているが，それによると10世紀第２四半紀の所産であるとのことである。

２は第16号土器焼成遺構からの出土である。残存状況は１と大変よく共通しており，もし人為的な破損だとすれば興味深い事実である。立髪が表現され明らかに馬と言えるが，馬具の類は何等身につけていない。

共伴遺物としてはロクロ土師器（杯・皿）が挙げられる。時期的には１とほぼ同じと考えてよさそうである。

⑩木更津市明石口遺跡（註21・第11図）

001Ｂ号住居跡から「動物形象の土製品」が出土している。頭部のみ残存し，鼻と耳を破損する。残存状況は永吉台遺跡群の２例と似ているがイメージ的には犬の様であり，馬であると断言できる形態ではない。目は刺突により表現され比較的丁寧に作られている。



第９図　永吉台遺跡西寺原地区92号住居跡出土例

共伴遺物としては2の高台付杯形土器（ロクロ土師器）が挙げられる。内面はナデによりロクロ目を消している。底部外面に「宗十」という墨書が認められる。「10世紀でもさほど下らない時期」として報告されている。

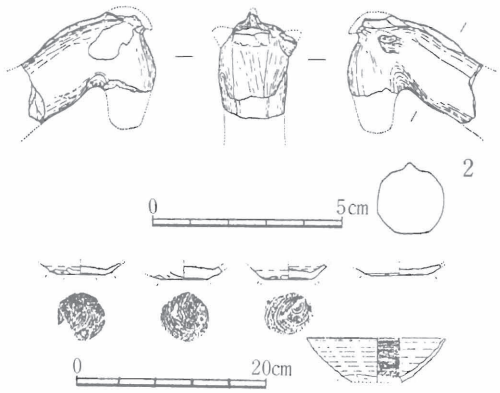
以上，大道遺跡と仁井宿東遺跡の例を除いて馬形土製品3点，人形土製品4点，動物形土製品10点の千葉県内で出土した資料を概観してきた。なお「動物形土製品」という語は動物を模した祭祀遺物の総称として用い，明らかに馬や人と断定できる資料についてのみそれぞれ「馬形土製品」,「人形土製品」と呼ぶことにした。

4．千葉県の様相

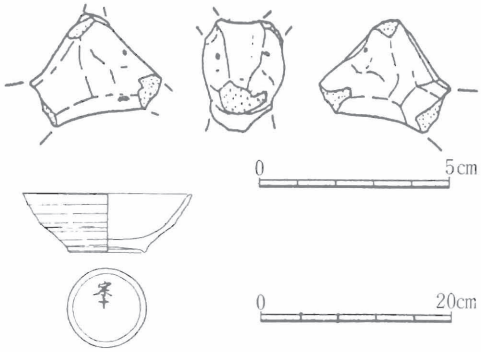
研究史の項で見たように小笠原好彦氏の研究によると，畿内では時代を追うにつれて飾馬から裸馬への簡略化,小型化という変遷が追えるという。千葉県では馬形の例が3点しか見られないうえに飾馬は1点のみである。また北の台遺跡や岩戸広台遺跡A地区，遂昌路遺跡の例が大場磐雄氏のいう土獣式だと考えたとしても，前者は10世紀の所産であり後者はむしろそれより古い年代が与えられよう。これは，現在のところ確証はないが伝播速度の問題によるのではないかと考えたい。(これについては東海地方等の様相も検討したうえで今後の課題としたい)。その過程でさらに簡略化されたものが岩戸広台遺跡や遂昌路遺跡のような，畿内では見られないほど粗雑な形態になったのではないだろうか。このように考えると，何を模した形代かわからないものも本来は馬だったのであり，使用目的は馬形と同様であったであろうと推測できよう。

また，千葉県内の資料はすべて土師質であり須恵質の出土例はないが，これについては地域性であろうと考える。九州地方では須恵質に比較して土師質が多く，畿内ではほとんどが土師質，北陸地方では圧倒的に須恵質が多いというそれぞれの地域性を示している。東海地方は，大谷川の調査例（後出）では土師質がほとんどである。

つぎに出土状況についてであるが単独出土が多いというのは全国的な傾向のようである。遺構に伴う場合は井戸跡・溝状遺構・河川の旧河道の水路跡等，水に関係するところが多いようである。



第10図　永吉台遺跡西寺原地区
16号土器焼成遺構出土例



第11図　明石口遺跡出土例

千葉県の場合は他地域と比較して住居跡出土の例がかなり多いように思われる。また永吉台遺跡群の土器（土師器）焼成遺構出土の例であるが，このような遺構そのものの検出例が少ないこともあってか特殊な印象がある。ただ畿内や特に北陸地方に多いが須恵器窯からの出土することがある。当然出土する馬形土製品も須恵質であるが，静岡県湖西町の大沢窯跡で27個体が出土した例もあり前田氏は注文生産の可能性を指摘している。永吉台遺跡群の場合は1点であるのでそこまでは言えないが，焼成を要するものである以上今後このような出土例は増えるであろう。

5．動物形土製品の性格

研究史の項でも見てきたように動物土製品，特に馬形土製品の性格についてはかなり研究されつくされている感がある。大きく分類すると「墓前祭祀」「水霊祭祀」「峠神祭祀」の3点が挙げられ

よう。新たな性格を示す資料は何等持ち合わせていない。

はじめに，先学の研究と重複するが馬が神への奉納品として重要な意味を持っていたことを示す資料を紹介したい。（傍点筆者）

まず「日本書記巻廿八　天武天皇元年壬申」のなかに

高市郡大領高市県主許梅。（中略）乃顕之日。於神日本磐余彦天皇陵奉馬及種種兵器。（中略）故是以便許梅而祭拝御陵。因以奉馬及兵器。

という記事が見える。また「続日本紀巻廿九　称徳天皇神護景雲三年」のなかには

乙卯。奉神服於天下諸社。以大炊頭従五位下掃守王。左中弁従四位下藤原朝臣雄田麻呂。為伊勢太神宮使。毎社男神服一具。女神服一具。其太神宮及月次社者。加之以馬形並鞍。

とある。ここでは「馬形」とされており，形代を使用していた可能性が強い。さらに「延喜式巻十六　陰陽寮」では御本命祭の際に神座に供える25品目を示しており，その中に「馬形五十疋」が含まれている。なお筆者の怠慢のため確認していないが，先学により「肥前国風土記　佐嘉郡」の条に人形・馬形を作って水霊に奉納したという記述があることが指摘されている。

さて，千葉県の例を見た場合であるが「墓前祭祀」「峠神祭祀」について考えるのは現段階では不可能であろう。古墳出土の例は封土中・主体部内を含めて見られず，また大場磐雄氏が峠神を想定するに至った埼玉県大里郡今泉遺跡のような立地の遺跡からの出土例も無い。そのような遺跡の調査例自体が少ないせいもあろうが，やはり中山吉秀氏の述べているような農民による「祈雨」等の水霊や「カマド神」に関わる祭祀と考えるのが妥当であろう。全国の例を見ても「墓前祭祀」や「峠神祭祀」よりも「水霊祭祀」の占める割合が大きいことは想像に難くない。千葉県では直接水に関連する出土状況を示す例はないが，鴻ノ巣遺跡の報告の中で「住居址の性格を「製鉄」に仮定し，鉄－鍛造－水－水霊信仰の可能性」が指摘されている（註22）。大変興味深い検討である。

人形土製品については，先学の研究では一様に前出の「肥前国風土記　佐嘉郡」の条を引用して馬形と共に「水霊祭祀」に使用された可能性を述べている。これに関して興味深い事実が検出されているので紹介したい。昭和58～60年にかけて静岡県静岡市神明原・元宮川遺跡の調査が行われ，多数の木製品（人形・馬形・斎串・刀形・舟形等），土製品（手づくね土器・ミニチュア土器・人形・馬形），卜骨，桃の種子等の祭祀遺物が出土している（註23）。本報告は未だ為されていないが，大谷川の旧河道より出土したもので氾濫を繰り返す大谷川の水霊に対する庶民の祈りが想像される。ここでは馬形と人形の土製品が多数一括して出土しており，「肥前国風土記」の記述を裏付ける資料となろう。

こうして見てくると，中山氏のいう屋内祭祀もさることながら，屋外に於けるムラをあげての「祈雨祭祀」に用いられたほうが一般的だったのではなかろうか。単独出土の例が多いこともそのためではないかと考えたい。

6　おわりに

大場磐雄氏の研究された当時はともかく，中山吉秀氏の研究と比較しても出土例は格段に増加している。それでもここで紹介した数例が認められるに過ぎない。無い知恵を搾り，先学の成果に頼りながら色々考えてみたがやはりこれだけの資料で性格云々言うのは危険であろう。今回は千葉県内の資料のみ扱ったが，関東→東日本→日本全国と視野を広げて考えてみなければならないだろう。また類例の増加によって新知見が得られるだろう。動物形土製品の研究は，まだまだ出発点に立ったばかりと言わざるをえない。

末筆ながら，小稿をまとめるにあたり財団法人印旛郡市文化財センター調査研究員飯島伸一氏，および当センター主任技師郷堀英司氏，藤岡孝司氏には大変お世話になった。記して感謝の意を表します。

註

1　大場磐雄「上代馬形遺物に就いて」
考古学雑誌27－4　1937

2　大野雲外「北陸地方の古物遺跡に就て」
人類学雑誌27－2　1910

小川栄一「美濃国発見土馬に就て」
考古学雑誌4－8　1913

梅原末治「河内国発見の土馬
考古学雑誌4－12　1913

中山平次郎「筑前国発見の土馬」
考古学雑誌４－12　1913
徳富万熊「岡山県に於ける考古学上の調査」
人類学雑誌32－８　1916
島田貞彦「摂津国豊能郡垂水先史時代遺跡」
史前学雑誌２－５　1930

などが挙げられる。なかには性格について述べているものもあるが，主観的分析の域を出るものではない。

3　大場磐雄「上代馬形遺物再考」
国学院雑誌67－１　1966
4　前田豊邦「土製馬に関する試論」
古代学研究53　1968
5　土井　実「大和土製馬考」
古代学４－２　1955
6　小笠原好彦「土馬考」　物質文化25　1975
7　小田富士雄「古代形代馬考」
史淵105・106合併号　1970
泉森　皎「大和の土馬」
橿原考古学研究所論集　1975
村上吉郎「土馬祭祀と漢神信仰」
－北陸道出土の土馬から－
石川考古学研究会々報25　1982

などが挙げられる。それぞれの地域性について詳細な検討が行われている。

8　中山吉秀「古代東国農民の祭祀－竪穴住居の出土遺物を中心として－」
房総の郷土史６　1978
9　中山　笑「絵馬と土馬の関係」
人類学雑誌30－２　1915
10　藤岡孝司「明石口遺跡／中金谷遺跡」
財団法人君津郡市文化財センター　1988
11　古内茂他「柏市鴻ノ巣遺跡」
財団法人千葉県郡市公社　1974
12　中山吉秀他「北の台遺跡」『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅲ』
財団法人千葉県都市公社　1975
13　古内茂他「谷田木曽地遺跡『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅷ』
財団法人千葉県文化財センター　1984
14　宮内勝己他「岩戸広台遺跡Ａ地区・Ｂ地区発掘調査報告書」
財団法人印旛郡市文化財センター　1988
15　「財団法人印旛郡市文化財センター年報４」
－昭和62年度－1988
16　四柳　隆「四街道市小屋ノ内遺跡出土の土製品について」研究連絡誌27　1990
17　白石竹雄他「公津原Ⅱ」
財団法人千葉県文化財センター　1981
18　白石浩他「千葉市大道遺跡・生実城跡
発掘調査報告書」
財団法人千葉県文化財センター　1983
19　註10に同じ
20　宮　重行「佐原市仁井宿東遺跡・
牧野谷中田遺跡」
財団法人千葉県文化財センター　1990
21　豊巻幸正他「永吉台遺跡群」
財団法人君津郡市文化財センター　1985
22　註11に同じ
23　「設立七周年記念企画展
古代からのメッセージいのりとまつり」
財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所　1990

参考文献

金子裕之「律令期祭祀遺物集成」　1988
吉川弘文館「国史大系日本書記後編」　1978
吉川弘文館「国史大系続日本記後編」　1977
吉川弘文館「国史大系延喜式中編」　1977
房総歴史考古学研究会
「房総における歴史時代土器の研究」　1987